**略歴書**

www.akira-wada.com

# 和田　章　（わだ　あきら）

東京工業大学名誉教授、工学博士

【専攻分野】耐震工学、建築構造学、構造設計

【本会活動】

日本地震工学会開設当時からの会員であり、2010 年の日本地震工学シンポジウム開催時の委員長を務め、東日本大震災の合同報告書編集委員会の委員長を務めている。

【略歴】

1968 年 3 月　東京工業大学工学部建築学科卒業
1970 年 3 月　東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了
1981 年 9 月　東京工業大学より工学博士授与

1970 年 4 月　株式会社日建設計入社、1981 年 12 月退職
1982 年 1 月　東京工業大学 助教授（工学部建築学科）
1984 年 4 月-7 月　The University of Washington, Foreign Lecturer
1989 年 11 月 同 教授（工業材料研究所）
1991 年 4 月-7 月　Massachusetts Institute of Technology, Visiting Professor
1996 年 5 月　同 教授（建築物理研究センター）
1997 年 4 月　同 教授（建築物理研究センター長、2007 年 3 月まで）
2011 年 3 月　同 大学・定年退職
2011 年 4 月　東京工業大学 名誉教授

【受賞】

日本建築学会賞・論文（1995）
日本建築学会賞・技術（2003）
市村産業賞・貢献賞（2005）
日本鋼構造協会業績表彰　日本鋼構造協会　特別賞（2006）
日本免震構造協会賞-2010-　技術賞　特別賞（2010）
Fazlur R. Khan Lifetime Achievement Medal for 2011 by the CTBUH（2011）
第 6 回日本構造デザイン賞　松井源吾特別賞（2011）

【委員会活動(直近 5 年間)】

2011 年 6 月　日本建築学会 会長（2013 年 5 月まで）
2011 年 10 月 日本学術会議 会員（土木工学・建築学委員会委員長）
2013 年 10 月 IABSE 副会長（国際構造工学協会）
など多数。

【著書および主要論文(代表的なもの 10 編程度)】

藤本盛久･須藤福三･和田章：任意形平面骨組の非線形応力解析、日本建築学会論文報告集、59-70、1971.11
和田章･久保田英之：不安定構造物の解析法に関する研究、日本建築学会構造系論文報告集、35-44、1988.05
和田章・広瀬景一：2 方向地震動を受ける無限均等ラーメン構造の弾塑性応答性状、日本建築学

会構造系論文報告集、37-47、1989.05
和田章・林静雄・坂田弘安・香取慶一・大谷晃弘：鉛直力と水平力を受ける鉄筋コンクリート立体骨組の力学的挙動に関する模型実験、日本建築学会構造系論文報告集、107-115、1993.01
Jerome J. Connor, Mamoru Iwata, Yi Hua Huang, Akira Wada: Damage-controlled Structures. I : Preliminary Design Methodology for Seismically Active Regions, Journal of Structural Engineering, ASCE, Vol.123, No.4, 423-431, 1997 .4
小波佐和子・岩田衛・田村和夫・和田章：建築物が寿命中に受ける総地震被害に注目した耐震設計に関する一考察、日本建築学会構造系論文集、165-171、1997.12
A. Wada: Damage Controlled Structures for Extreme Loading, Key-note, Structures and Extrema Events, IABSE Lisbon, 92-103, 2005.9
A. Wada, K. Ohi, H. Suzuki, M. Kohno, Y. Sakumoto: A Study on the Collapse Control Design Method for High-rise Steel Buildings, Structural Engineering International, Vol.16, No.2, 2006.5
石井正人・和田章：速度依存型ダンパーを設置した鋼構造建物の等価線形化法による地震応答予測、日本建築学会構造系論文集、803、2009.05
Zhe Qu, Akira Wada, Shojiro Motoyui, Hiroyasu Sakata and Shoichi Kishiki: Pin-supported walls for enhancing the seismic performance of building structures, Earthquake Engineering and Structural Dynamics, IDO: 10.1002/eqe.2175, 2012.3

【所信】

東日本大震災のあと、自然と人間の関係について考えさせられることが多い。自然から遠い都会に住んでいる人でも三食の食事を欠かすことはできず、自然の恵みがなければ人間は生きていけない。たが、自然の猛威は怖い。人間社会が営々と作り上げてきた東北の沿岸地のまちや村を、大津波は強いエネルギーで壊した。何度も被災地に行ったが、片付かない瓦礫の上に可憐な花が咲き、何事もなかったように多くの鳥が舞っていた。自然は強い、だが人間は弱い。そして今の人間は自然だけでなく、文明に支えられてしか生きられないことを知らされる。

2013 年夏に気仙沼の復興の姿を見に行ったが、瓦礫は片付けられ処理工場で細かく分類され、最終的には砂や砂利として復興の工事に使われる。自然災害から立ち直ろうとする人間の力にあらためて感動した。自然と人間を分けて考える必要はなく、人間も含めて全体が自然であると考える主張があるが、その通りと感じる。

江戸時代からの開国、明治、大正、昭和そして世界第二次大戦の敗北、もうすぐ７０年になる。我々が進めてきた文明社会の方向を見直す時期が来ているように思う。この間、学問だけでなく学会も次々に分化が進み、議論が細かくなっている。専門家から専門家に伝言ゲームのように情報が伝わる方法では誤解が増長され、大きな問題は解決できない。

阪神淡路大震災のあと、先達は日本地震工学会を設立し、地震工学に関わる多くの研究者や技術者が同じ場で議論を始めている。東日本大震災を受け、他分野の専門家が共同で取組むことの重要性はますます高まっている。日本地震工学会の先生方が中心となり、８学会の共同による「東日本大震災合同報告」の編纂も進んでいる。

スマトラ、インド、パキスタン、中国汶川、イタリア、ハイチ、チリ、ニュージーランド、フィリピンなど 21 世紀の今でも多くの国々が大きな震災を受けている。地震災害の低減の重要性はわが国だけの問題ではなく、研究者・技術の国際的な交流が重要である。世界地震工学会議（WCEE）は 1956 年に始まり、1960 年と 1988 年が日本で開催された。2016 年はチリで開催されるが、2020 年は是非日本で開きたい。

日本地震工学会には、ホームページの充実、シンポジウムの開催、会誌の発行、論文集の発行、社会へのアピールなど、重要な仕事が多い。会長に選出された場合には、安田進会長のもとで研鑽を積み、次の２年間の活動を積極的に進めたいと考えています。